# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（　3　年計画の　3　年目）

1. 研究課題

（和文）アジアの通商ネットワークと社会秩序

（英文）A Study on the Making of Social Orders in Asian Commercial Networks

2. 研究代表者氏名

籠谷直人

3. 研究期間

2012 年 04 月 - 2015 年 03 月（3 年度目）

4. 研究目的

主権国家の形成が、近代人の目標であったとするならば、そうした国家形成との関わりの薄い、あるいは国家の後援をうけない経済主体は、歴史学からは看過される傾向にあった。そして、主権国家システムが、「温帯」で創造されたものであるとすれば、「熱帯」における人々の営為も、歴史学からは看過されてきたと考えられる。 しかしながら世界人口の過半は、この熱帯に居住している。そして、近年の歴史学研究は、熱帯に住む人々のなかに、世界の様々な地域から移動してきた移民が多く存在していることに注目しつつある。それでは、熱帯において、主権の後援を得ない主体は、どのような社会を形成していたのであろうか。本研究班は、熱帯の東南アジアを対象に、「移動」を「生存の戦略」に選び取った、華僑華人の動態に強い関心を払おうとしている。熱帯における生存の戦略を、歴史学から問い直したい。 検討の中心に据えたい資料は、ジャワで活動した華僑華人らの公文書類である。オランダは、１６世紀末に東インド（現在のインドネシア）に到着する。そして東インド会社は、華僑・華人社会との関係を維持するために、彼らのなかから「カピタン」Kapitein（１８３０年代からは、マイヨール Majoor）を選び出した。そして、カピタンの補佐役になった華僑華人の官吏は、リウテナント Luitenant からセクレタリー Sekretaris にいたるまで、多様な役職についた。華僑華人は、このようにして官僚組織になぞられた、自治組織たる「公館」Kong Koan を設置し、その生存基盤を作り上げたと考えられる。本研究班は、この公館が残した文書を通して、華僑・華人が、熱帯という自然環境や、植民地権力が創造した諸制度に対応して作り出した、社会秩序を議論してゆきたい。

5. 本年度の研究実施状況

本年度は 3 年計画の 3 年目にあたるため、来年度に編集を進める研究報告書を見据えた報告を中心に、計 5 回の研究会を行なった。毎回の参加者は、15 名ほどである。この最終

年度も、第一年度、第二年度より引き続き、華僑華人らの公文書であるバタヴィア華僑華人
公館の『公案簿』や『開吧歴代史紀』などの諸文書史料について検討をすすめた。『開吧歴代史紀』は、華人がのこした「バタヴィア開発史」にあたるもので、海外からも強い関心が寄せられている。さらに、ジャカルタの国立公文書館とデン・ハーグのオランダ公文書館でも史料調査・収集を行ない、華僑史をはじめ、建築史、糖業史、海運史の分野からの研究発信の準備もできた。他方において、本年度は、19 世紀後半から 20 世紀前半の蘭領ジャワや英領シンガポールの貿易や金融を専門にする研究者を招聘し、近世から近・現代にかけての「アジア間交易の形成と構造」を長期的かつ複眼的に理解する手がかりを提供していただいた。

8. 共同研究会に関連した公表実績

共同研究会に関連した公表実績 国際ワークショップ「Jakarta’s Past：Space,Ethnicity and Urban Development」(京都大学人文科学研究所)2013 年 4 月 3 日。 国際共同研究会「Seminar on East Asian Maritime History：Asian International Trade Order and Chinese Merchants」(中国：厦門大学南洋研究院)2013 年 12 月 25 日。籠谷直人・鍾淑敏編『堤林数衛文書選輯』中央研究院台湾史研究所 2014 年 2 月。国際ワークショップ「台湾銀行データベース臺灣銀行所藏日治時期文書 公開記念ワークショップ」(京都大学人文科学研究所)2015 年 3 月 7 日。謝国興,鍾淑敏,籠谷直人,王麗蕉共編 『茶苦来山人の逸話：三好徳三郎的台湾記憶』中央研究院台湾史研究所, 2015 年 3 月。

10. 共同利用・共同研究の参加状況

| 区分 | 機関数 | 参加人数 | | | | | 延べ人数 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 総計 | 外国人 | 大学院生 | 若手研究者 | 女性数 | 総計 | 外国人 | 大学院生 | 若手研究者 | 女性数 |
| 所内 | 1 | 4 | | | | | 20 | | | | |
| 学内(法人内) | 3 | | | 1 | 1 | | 7 | | 2 | 5 | |
| 国立大学 | 3 | 4 | | 1 | | 2 | 28 | | | | 8 |
| 公立大学 | 1 | | | | | 1 | 5 | | | | 5 |
| 私立大学 | 1 | 1 | | | | | 5 | | | | |
| 大学共同利用機関法人 | 1 | 1 | | | | | 5 | | | | 5 |
| 独立行政法人等公的研究機 | | | | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 関 | | | | | | | | | | | |
| 民間機関 | | | | | | | | | | | |
| 外国機関 | | | | | | | | | | | |
| その他 | | | | | | | | | | | |
| 計 | 10 | 10 | 0 | 2 | 1 | 3 | 70 | 0 | 2 | 5 | 18 |

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

| | |
|---|---|
| 総論文数 | () |
| 国際学術誌に掲載された論文数 | () |

※（　）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載

論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合

| | |
|---|---|
| 役割 | |
| 総論文数 | () |
| 国際学術誌に掲載された論文数 | () |

※（　）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載

高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合

| 掲載雑誌 | 掲載論文数 | 主なもの | |
|---|---|---|---|
| | | 論文名 | 発表者名 |

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

| 理由 | | | |
|---|---|---|---|
| 掲載雑誌 | 掲載論文数 | 主なもの | |
| | | 論文名 | 発表者名 |

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す